

<論説>

価値概念と価値形態

頭 川 博

目 次

はしがき—問題の所在	第三節 価値と価値形態との内在的
第一節 二商品の価値関係と単純な	関係
価値形態	第四節 「回り道」の理論的眼目
第二節 価値概念の定立—価値表現	むすび
の必然的根拠	

はしがき—問題の所在

周知のように、『資本論』第I巻第一章第三節「価値形態または交換価値」の基本課題は「貨幣形態の生成」(*Das Kapital, I, Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 62*)を論証することによって同時に「貨幣の謎」(*ibid.*)を解くことにあるが、マルクスはこの基本課題の解決に際して先ず価値形態の完成形態をなす貨幣形態を遡及分析して単純な価値形態という原基形態に還元し、この単純な価値形態を分析対象として真正面に据え「すべての価値形態の秘密」(*ibid., S. 63*)を原理的に解明するのである。それ故に、二商品の価値関係に含まれた単純な価値形態こそ価値表現の本来的な形態をなす。ところが、一切の固定観念を捨て去って『資本論』におけるマルクスの論述に密着して二商品の価値関係に虚心に着目するとき、われわれにとって以下の二つのごくプリミティブな疑問が生じるのである。

第一点。『資本論』からの引用をまつまでもなく、金以外のすべての諸商品が貨幣商品としての金と相対する場合には日常の支配的な観念から諸商品はその現物形態と別個の価値形態を貨幣商品としての金姿態でもち、従って、金の現物形態が諸商品の一般的な等価形態として君臨することは一種の常識に属するが、しかし、リンネル商品が上衣商品と価値関係にある場合、何故にリンネ

ル＝上衣なる価値関係が同時に単純な価値形態であるといいうるのか、何故に上衣の使用価値はリンネル価値の現象形態とみなされうるのか、という疑問が生じるのである。換言すれば、「価値形態または交換価値」という第三節の表題通り、価値形態と交換価値とは同義語であるが、ここでは、単純に量的関係として現われる或る使用価値と別の使用価値との交換関係が何故に或る使用価値に対して別の使用価値が価値そのものを表わす関係としてみなされうるのかという疑問が生じるのである。というのは、現実の交換関係あるいはその理論的抽象としての価値等式においてはリンネルも上衣もともに使用価値しか表わしていないのに、ここでは両者の交換関係に立ち入ってみると上衣の使用価値がリンネルの価値そのものを表わすというきわめて奇妙な取り違えが指摘されているからである。

第二点。しかし、われわれの疑問はそれだけに尽きない。即ち、リンネルと上衣との価値関係が単純な価値形態を内包することの確認はいわば価値形態を価値概念の内的必然的な展開として論証する基本課題の事実的な出発点にすぎず、更に論理を一步進めると、一体上衣の現物形態が如何にしてリンネルの価値形態として転倒的に現出しうるのかという根本的な疑問が生じるのである。何故ならば、第一の疑問点が解消したとしても、そこでは二商品の価値関係が単純に貨幣形態の原型として確定されたにすぎず、価値という社会的定在が如何なる理論的根拠に立脚して一八〇度正反対の性格をもつ使用価値という自然的定在で転倒的に現出しうるのか、価値と価値形態との間に秘められた内面的関係如何という根本問題を少しも氷解させないからである。別言すれば、第一の疑問の解決は単にリンネルに伏在する超感覚的な価値が上衣という感覚的な使用価値で顕現している事態そのもの事実的な把握にしかならず、この事実的な把握は、マルクスが例解している通り、酪酸に伏在する超感覚的な化学的実体が蟻酸プロピルという感覚的な現物形態で表わされる事柄の事実的な把握と同じであって、価値と価値形態との間に隠された内面的関係は超感覚的な定在が感覚的な定在で現象する一般的な関係に解消できないからである。従って、二商品の価値関係が単純な価値形態を内包する事態を確認したとしても、

価値という社会的定在が如何なる内在的關係にもとづいて使用価値という自然的定在で転倒的に現出しうるのかという中心問題は依然として不明に留まらざるをえないのである。

以上、われわれは、価値表現の本来的形態たる単純な価値形態の考察に関してきわめて素朴にして基本的な二つの疑問点を提出したが、この二つの疑問点は換言すれば単純な価値形態の分析の根幹たる「相対的価値形態の内実」の二大支柱をなす第三パラグラフと第五・第六パラグラフとの論理的關係如何という未解決の一大焦点にほかならないのである。即ち、「相対的価値形態の内実」における価値と価値形態との内在的關係に関する基本的論証は「課題はすでに解決されている。」(*Kapital*, I, S. 66) という一文で終わる第六パラグラフまでで尽きるが、ここでの基本的論理展開の一方の支柱たる第三パラグラフでマルクスは先ずリンネル＝上衣なる価値等式を分析対象に設定して「質的に等置された二つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。ただリンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？」(*ibid.*, S. 64) と自問し、「リンネルが自分の『等価物』または自分と『交換されうるもの』としての上衣にたいしてもつ關係によって、である。」(*ibid.*) と自答するのである。ところが、第五・第六パラグラフに眼を転じると、今度は、リンネルの上衣に対する価値關係において織布という具体的労働に潜在する抽象的人間労働は裁縫という具体的労働で現象し、総じて織布労働に潜在する抽象的人間労働は終局的には裁縫労働が結実している上衣の使用価値で現象せざるをえないメカニズムをマルクスは説くのである。そこで、われわれにとって価値と価値形態との必然的な関連を一見二重的に叙述しているかに映じる二大支柱の論理的關係如何という重大な疑問が発生せざるをえないのである。何故ならば、第三パラグラフにおいて価値と価値形態との必然的な関連という根本問題が既に解明されていると理解するならば、概念上第五・第六パラグラフの重複的な叙述は不要となり、反対に、事実上先刻示唆したように第三パラグラフの固有の課題が単純に二商品の価値關係から単純な価値形態を析出し二商品の価値關係を貨幣形態の原基形態として規定することのみあり、価値という社会的定在が一八〇度正反対物である使用価値という自然的定在で転倒的に現出しうる内在的

な依存関係の本格的な分析こそ第五・第六パラグラフの固有の課題であるとするならば、両支柱の固有の課題は根本的に相異なるものとなり、従って、上述の二つの考え方は本質的に対立することになるからである。換言すれば、われわれの問題意識は第三パラグラフと第五・第六パラグラフとを価値と価値形態との内面的関係分析にあてられた二様の論述と把握する支配的な見解⁽¹⁾に対する根底的な疑問にあり、もし前者の独自の課題が二商品の価値関係から貨幣形態の萌芽としての単純な価値形態を析出することだけに限定され、後者において初めて価値という社会的定在が一点の共通性ももたない使用価値という自然的定在で転倒的に現象する摩訶不思議さに真正面から経済学的な謎解きの分析が加えられているとするならば、ここにおいて、価値と価値形態との間に隠蔽された内面的関係に関する支配的な見解はその根本的な軌道修正を要求され、ひいては、価値形態がそこから自然必然的に発する母胎としての価値概念の把握が根底的に鼎の軽重を問われることは必至だからである。この意味において、ここで提出した二つの疑問点解決は「価値の必然的な表現様式または現象形態」(Kapital, I, S. 53)としての価値形態の理解度を試すのみならず、総じて価値形態の基底に宿る価値概念の理解度を判定する試金石をなすのである。

それ故に、本稿の課題は、二商品の価値関係から貨幣形態の細胞としての単純な価値形態を析出することを分析の始点として、事実的前提に設定された単純な価値形態の理論的な成立根拠を解明することにある。以下、先ず第一節において、二商品の価値関係が何故に単純な価値形態たりうるのかを究明し、続く第二節において、論理を一転させて、価値形態として現象する本質としての価値が社会的定在をなす所以、換言すれば価値が価値形態として現象する必然的な根拠を確定し、しかるうえで、第三節において、第一節で析出した単純な価値形態の理論的な成立根拠を第二節で定立した価値概念を根本的基礎に据えて発生論的に説き、もって価値概念と価値形態との間の内面的連絡関係を解明する。そして、第四節において、第三節までの議論の系論として「回り道」の理論的眼目をえぐりだす。以上における価値と価値形態との間に一本の上向的關係をつける理詰めの分析によって通説的な理解の根本的な再検討が迫られ、

ひいては価値形態の基底に宿る価値概念の把握の不十分性が回帰的に指し示されることになる。

- (1) 念のために指摘しておけば、このような支配的見解の代表的論者は富塚良三氏である。というのは、既に述べたように、支配的な理解からすれば「相対的価値形態の内実」の論述のうち第五・第六パラグラフは必ずしも必要としないながらもがなの叙述とならざるをえないことは論理必然的であるが、実際、富塚氏は「相対的価値形態の内実」の論理展開に相当する説明を事実上その第三パラグラフにのみ依拠して展開されており（〔3〕 30—2 ページ）、ここでは通説的見解の本質的性格があらわに露呈しているのである。この点では、学界の最新の研究成果を集約したとされる『経済学辞典』（第二版、岩波書店、1979年）における「価値形態」の項目での富塚氏の説明もまた同様である。なお、われわれが最も多くを学んだ久留間鮫造、下平尾勲両氏の二著作（〔1〕、〔4〕）においても「相対的価値形態の内実」の二大支柱の理論的關係如何という難問は未解決のままに残されているように思われる。つまり、現在なお価値と価値形態との間に伏在する内在的關係については理論的な解明がつけられていないのがいつわらざる状況なのである。

第一節 二商品の価値関係と単純な価値形態

はしがきで述べたように、本稿の中心課題は単純な価値形態において価値という社会的定在がそれ自体としては無関係な使用価値という自然的定在で転倒的に現象する 摩訶不思議さの背後に隠された 秘密を明らかにすることにあるが、われわれにとってはそれ以前にリンネルと上衣との価値関係が何故に貨幣形態の原型たりうるのかという疑問が生じる。そこで、本節において、価値と価値形態とを概念的に架橋する一方の論理的前提として二商品の価値関係が単純な価値形態を含蓄するとされる理論的根拠を究明する。

リンネルと上衣の価値関係は何故に単純な価値形態を含蓄するといいうるのか、換言すれば上衣の使用価値は何故にリンネルの使用価値に対立して価値そのものを代表するといいうるのか、この課題解決にとって決定的に重要なことはリンネルと上衣の価値関係をそれ自体としてあるがままに受けとめること、換言すればここではリンネルの使用価値と上衣の使用価値とが単純に量的關係にのみあることに極力着目することにある。というのは、往々にして理論的に

混同されがちであるが、もしわれわれが二商品の価値関係に注目してここでは両者が一方の使用価値にも他方の使用価値にもかかわりのない共通な第三者としての価値において同等であるというならば、それはわれわれが商品についての分析を通じて得た判断ではあっても価値関係に在る二つの使用価値相互のありのままの関連を描写していることにはならず、諸商品の価値への還元の論理段階と諸商品の価値表現の論理段階とが無意識的に同一視される結果となり、従って、二商品の価値関係は単純な価値形態を与えはしないからである。換言すれば、ここでは二商品はともに使用価値形態においてのみ実在し、従って、相異なる二つの使用価値がそれ自体として等置されているのである。そこで、われわれは、課題解決のために相異なる二つの使用価値が相対する価値等式に最大限着目しなければならない。そうすると、価値等式とは単純に量的関係のみ在る或る一種類の使用価値と別の種類の使用価値とが取り替えられる交換関係を表すから、ここではリンネルと上衣とは現実的使用価値としては一点の共通性もないのに価値としては二つの使用価値は両者の形態的相違如何にかかわらず直接的に同一であるということが語られているのである。換言すれば、交換価値とはある一種類の使用価値が別の種類の使用価値と交換される量的関係であるが、ここで注意すべきは相異なる二つの使用価値が単なる量的割合でのみ関係し合っている点にあり、量的比較可能性は比較される諸物の質的同等性を論理的前提とするから、交換関係あるいはその理論的抽象としての価値等式におかれた二つの相異なる使用価値は両者の形態的相違にもかかわらずその使用価値のままに価値として直接的同一性をもつのである。それだからこそ、「一着の上衣は十エレのリンネルの二倍の価値をもつ」(Kapital, I, S. 60, 傍点一頭川)という表現方法がとられるのである。つまり、この表現方法では上衣とリンネルとは使用価値としては相異なるのにそのままの形態で価値の量的比較がなされているのであるが、これは価値関係におかれた相異なる使用価値はそのままの形態で価値として直接的同一性をもっているからにはかならない。それでは、一体何故に価値関係におかれた相異なる使用価値はそのあるがままの姿態で価値として直接的同一性をもつのであろうか。「交換関

係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められる（gelten）」（*ibid.*, S. 52, 傍点一頭川）理論的根拠は一体どこにあるのか。その究極的理由は、商品価値が労働支出の具体的形態にかかわらない無差別一様な人間労働の結晶にほかならず、それ故に、価値がリンネルと上衣とのどれに現われるかは価値それ自体にとってはどうでもよいという点にある。別言すれば、マルクスの主張するように「およそ商品の物的な属性は、ただそれらが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりでしか問題にならない」（*ibid.*, S. 51）のであり、だから、「価値としての上衣やリンネルではそれらの使用価値の相違が捨象され」（*ibid.*, S. 59, 傍点一頭川）るのである。そもそも、反省的に回顧すれば、ある使用価値と別の使用価値とを社会的に関係づけるのは両者に対象化された人間労働一般という単一性であり、相異なる使用価値のもつ具体的有用形態は人間労働一般という両者の同一要素には無縁であるから、相異なる使用価値が対象化された抽象的人間労働の量に応じて交換されるとすれば、両者の間には使用価値的相違が存在しないのは理の当然である。まさしく、二商品の価値関係が単純に二つの相異なる使用価値の交換される量的関係として現われる理論的根拠はここにこそある。

そして、ここでは上衣の使用価値が何故にリンネルの使用価値に対立して価値そのものを表わすのかという課題は既に即自的に解決済みなのである。即ち、リンネルはそれ自体として単独では使用価値しか現わしていないが、しかし、リンネルと上衣との価値関係の内部では二つの使用価値は価値として直接的な同一性をもち瓜二つだということになり、従って、ここでは上衣の使用価値はリンネルの使用価値に対して価値そのものを代位していることになるということ、これである。つまり、価値関係におかれたリンネルと上衣とがその現物形態のまま直接的な同一性をもつということは両者が一定の量的割合において互いに置き換え可能だということにほかならず、価値にとってはそれが現われる現物形態に無頓着であるからリンネルの現物形態に相対する上衣の現物形態はリンネルの価値形態を意味することになるのである。このことは、棒砂

糖と鉄片とが天秤にかけられるとき、両者が具体的有用形態の相違によらずその現物形態のまま直接的な同等性をもつとみなされ、従って、棒砂糖の現物形態に相対する鉄片の現物形態が棒砂糖の重さを代位して棒砂糖の重量が鉄片の現物形態の一定量だといわれるのと同じである。従って、リンネルの価値は、現物形態と区別された価値形態を、リンネルの使用価値が上衣の使用価値と交換される量的関係のうちに受け取るのである。別言すれば、単に量的関係でのみ結ばれた二つの商品の価値関係は単純な価値形態そのものにほかならないのである。「二つの商品の等価性の表現、たとえば、 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B ……は相対的な価値の単純な形態であ」(*Das Kapital*, 1. Aufl., Hamburg, 1867, S. 15)り、「諸商品が使用価値として相互に交換される量的な関係は、諸商品の価値の表現である。」(*Theorien über den Mehrwert*, III, Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, 1965, S. 124, 傍点—マルクス)そして、以上の概念的な意味合いにおいて、リンネルの現物形態に相対する上衣の現物形態は「一般的な価値肉体」(*Kapital*, 1. Aufl., S. 27)として一般的な直接的交換可能性の形態にある貨幣の萌芽をなし、従ってまた、二商品の価値関係に内蔵された単純な価値形態は貨幣形態の端初形態をなすのである。

それ故に、これまでの考察からすると、二つの違った使用価値の価値関係をして両者の直接的な同等性関係として把握することと単純な価値形態として把握することとは概念上表裏一体の関係にあるということになり、両者は結局同一の問題に帰着する。逆言すれば、リンネルと上衣の価値関係を眼前に据える際、両者の使用価値的相違に固執するならば、リンネルの現物形態と上衣の現物形態とがここではその具体的有用形態のままに価値として直接的な同一性をもつという概念的な理解に欠落し、従ってまた、交換関係において単純に量的関係にのみ実存する二つの相異なる使用価値の現実的關係を見失うことになり、その論理必然的な帰結として、二商品の価値関係の単純な価値形態としての論理的な把握を遮断するのである。

ところが、『資本論』での「相対的価値形態の内実」の叙述との対応関係で

例えば、二商品の価値関係から単純な価値形態を論理的に析出するのは一方の理論的支柱をなす第三パラグラフにおいてにほかならない。第三パラグラフの核心的論述は以下の通りである。「質的に等置された二つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。ただリンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？リンネルが自分の『等価物 (Äquivalent)』または自分と『交換されうるもの (Austauschbares)』として上衣にたいしてもつ関係によって、である。」(Kapital, I, S. 64)

みられるように、マルクスはここで先ず二商品の価値関係が単純な価値形態として認められるのは「どのようにしてか？」と問い、この設問に対してリンネルは上衣に「等価物」として関係するからだとずばり核心を衝いた回答を与え、以下これを敷衍しているのである。それ故に、上述の文脈の解釈上のポイントは等価物というキーワードの理解如何にある。等価物範疇の理論的含意については以下の諸論述が何よりも重要な示唆を与える。

「諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてであるとすれば、対象化された労働としての諸商品の定在、つまり、具体化された労働としての諸商品の定在とは、諸商品の単一性、諸商品の同一要素のことである。このようなものとして諸商品は質的に同じであり、ただ、それらが表わす同一物すなわち労働時間の大小に応じて、量的にだけ区別される。諸商品は、この同一なものの表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎり、等しい大きさの価値、等価物である。」(Mehrwert, III, S. 125, 傍点—マルクス)

「使用価値としての諸商品の全面的外化においては、諸商品は、その特有の諸属性によって特殊な欲望を充足する特殊な物としてのその素材的相連に応じて、互に関係づけられる。しかし、このような単なる使用価値としては、諸商品は相互にとってどうでもよい存在であり、むしろ無関係である。使用価値としては、諸商品は、特殊な欲望との関係でだけ交換されうるにすぎない。ただ諸商品が交換されうるのは、ただ等価物としてだけであり、しかも諸商品が等価物であるのは、ただ対象化された労働時間の等しい量としてだけである

から、使用価値としての商品の自然的諸属性への顧慮，したがってまた特殊な欲望にたいする商品の関係への顧慮は、いっさい消え去っているのである。」
 (Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, 1961, S. 30, 傍点—マルクス)

みられるように、上記引用文において述べられている内容は結論的にいえば既に上述において考察済みの趣旨と同一である。即ち、マルクスのいうには、諸商品の社会的関係は諸商品の現物形態それ自体がもつばら質的に同等な社会的実体の純粋に量的にのみ異なる定在として相互に認め合うという論理的前提に立脚するのであるから、諸商品の千差万別の使用価値は価値関係の内部では相互に価値として無差別一様な経済的定在としてのみ実存し、ここにおいて諸商品の相異なる使用価値は等価物を形成する、というのである。従って、等価物とは商品の使用価値をそれがもつ具体的有用な属性に無関係に単に一面的に価値の素材的担い手として措定した範疇にほかならず、それ故にまた、通常ある種類の使用価値と別の種類の使用価値とが同じ価値を含有するならば、二つの相異なる使用価値は等価物であるというのである。まさしく、「同一の労働時間が対象化されているいろいろな使用価値の相関的な諸量は等価物(Aquivalent)である。」(Kritik, S. 18, 傍点—頭川) いうまでもなく、ここでは相異なる使用価値が等価物と規定されている以上、相異なる使用価値それ自体が価値として直接的に同一であると把握されている点に最大限留意すべきである。それだから、上掲の第三パラグラフの引用文に立ち返るならば、「リンネルが自分の『等価物』……として上衣にたいしてもつ関係」とは、リンネルの使用価値が上衣の使用価値をして特定の間欲を充足させる有用物としての具体的有用形態にはかかわりなく価値として同等であると認知する関係にほかならない⁽⁴⁾。従って、総じて、ここにおいて、等価物範疇の概念的意味合いを十二分に踏まえるならば、リンネル=上衣という価値等式にて左辺のリンネルの現物形態は単独では使用価値しか表わしていないのに反して、右辺の上衣の現物形態はそのままでリンネル価値と無区別だということになり、リンネル価値を独立的に表示している関係が認められるのである。つまり、マ

ルクスのいう通り、価値関係の内部では「ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されうるものとしての上衣に関係することができる」(*Kapital*, 1, S. 64, 傍点一頭川)のであるから、ここではリンネルの使用価値と上衣の使用価値とはその現物形態のままに価値として相互に置き換え自在であり、従って、リンネルの使用価値に相対する上衣の使用価値はリンネルの価値を代位しうるのである。文字通り、「等価物とは、じつは他の一商品の使用価値で表現された一商品の交換価値である。」(*Kritik*, S. 25) 上掲の第三パラグラフの引用文は概して以上のように理解されるべきである。

かくして、われわれは、これまでの論理展開において、先ず二商品の価値関係が何故に単純な価値形態として認められるのかというきわめてプリミティブな問題を提起し、この問題提起に対して価値関係におかれた相異なる二つの使用価値が単純に量的関係にのみある点に着目してここでは両者がその現物形態のままに価値として直接的に同一であることを導出し、もって他方の商品の使用価値は一方の商品の使用価値に対して価値そのものを表わすことを明らかにしたのである。別言すれば、ここでの分析の要点は二商品の価値関係を二つの使用価値の等価物としての関係として把握する点にあり、二つの使用価値の等価物としての関係がそのまま或る商品の価値をして別種の商品の使用価値で表わせしめる単純な価値形態をなすということである。従って、「相対的価値形態の内実」の一方の理論的支柱をなす第三パラグラフの固有の課題は、二商品の価値関係から貨幣形態の細胞形態としての単純な価値形態を析出することにある。(2)(3)

最後に、以上の分析を補足する意味でいいそえておけば、その理論的重要性に比して第三パラグラフの核心的叙述のコンパクトさにある種の奇妙さを感じるが、しかし、これまでの理論的分析の実質的内容は既に第一節「商品の二つの要因 使用価値と価値」において等価物という用語こそ使われていないが展開済みであるからにほかならない。何故ならば、マルクスは、そこにおいて、「交換価値は、まず第一に、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる」(*Kapital*, S. 50, 傍点一

一頭川)として交換価値をあるがままに把握し、以下これをパラフレーズして次のように述べているからである。「交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められる。」(ibid., S. 52) マルクス自身、「第二版後記」において第一節の理論的考察をもって「それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出」(ibid., S. 18, 傍点一頭川)と述べているのはこれがためであり、第三パラグラフでは一商品の「交換価値が表現される…等式」が明示的に貨幣形態の原基形態として定立されているにすぎないのである。このように考えれば、第三パラグラフの論述の簡潔性に対する奇妙さは氷解する。

- (1) 価値関係におかれたリンネルと上衣とがその現物形態のままに価値として直接的な同一性をもつということは、裏返していえば、リンネルの現物形態も上衣の現物形態もともに等価物としては概念上任意に分割可能だということにほかならない。

「一軒の家の使用価値のように、商品の使用価値がどんなに不可分のものであろうとも、交換価値としてはすべての商品は任意に分割可能である。」(*Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie [Rohentwurf]* 1857—58, Anhang 1850—59, Dietz Verlag, Berlin, S. 888)

「交換価値としては、どの商品も、それに対象化されている労働時間そのものと同様に分割可能である。諸商品の等価性は使用価値としてのそれらの物理的分割不可能性と無関係である。」(*Kritik*, S. 28)

つまり、リンネルの現物形態と上衣の現物形態とが等価物を形成する限り、等価物としての商品の分割可能性と使用価値としての商品の物理的分割不可能性とは無関係なのである。だからこそ、一定量のリンネルの価値は上衣の使用価値の不可除部分で表現されうるのである。マルクスが「相対的価値形態の量的規定性」において「20エルのリンネル=1/2着の上衣」(*Kapital*, I, S. 68)という価値等式を掲げているのはこのためにほかならない。従って、単純に使用価値としての上衣の物理的分割不可能性をもって「20エルのリンネル=1/2着の上衣」という価値等式の不合理性を批判される宇野弘蔵氏を初めとする諸論者の見解(宇野[5]33ページ、降旗節雄[7]21ページ)は見当はずれといわねばならない。何故ならば、ここには等価物としての商品の分割可能性と使用価値としての商品の物理的分割不可能性との概念的な混同があるからである。逆言すれば、ここで上衣の使用価値はリンネルの価値の等価物としてはその物理的分割不可能性に関係なく任意に分割可能でなければ均質性をもって本質的な特性と

する価値の適切な現象形態従ってまた貨幣の萌芽形態とはいえず、「簡単な価値形態は……その中に価値形態の一切の秘密を蔵している」（宇野〔6〕187ページ）とはいえないだろう。

- (2) 従って、ここでの第三パラグラフの論述の趣旨からすれば、二商品の価値関係のうち単純な価値形態を見いだすだけの分析の具体的例解として化学的実体と化学的物質との関係を挙げるマルクスの説明をもって「価値形態の性格を誤って理解せしめる危険性がある」（降旗〔7〕19ページ）り、それ故、ここでの「自然科学的な例証は適切ではない」（同ページ）という主張は的を逸した批判というべきである。というのは、その理論的内容は一応さておき、降旗節雄氏がいみじくも主張されているように、確かに「物質とその化学的成分との関係、あるいは物体とその物理的屬性との関係は、商品の価値形態と価値実体との関係とは根本的に異なる」（同ページ）が、しかし、当の第三パラグラフにおいては「商品の価値形態と価値実体との関係」つまり価値という社会的定在が如何にして一点の共通性ももたない正反対物たる使用価値という自然的定在で転倒的に現出しようのかについては直接本格的に究明されてはおらず、ここではその根本問題論証の論理的な前提として単に二商品の価値関係のうちから単純な価値形態が論理的に析出されているにすぎないからである。換言すれば、二商品の価値関係から単純な価値形態を抽象する分析は二商品の直接的同源性関係を単に事実的に価値関係と抑える形式論理学的な手続きによって可能なものであり、だからこそ、この限りでは、化学的実体と化学的物質との関係についての例解つまり超感覚的な定在と感覚的な定在との関係についての例解は第三パラグラフの主題を敷衍するための具体例として完璧に役立つのである。従って、ここから引き出される教訓は、われわれが「価値形態論の基本テーマ」（同上、19ページ）を表面的あるいは没概念的に「ある商品の価値は他の商品の使用価値量でしか表現されえない」（同ページ）、またはある商品の価値は超感覚的であるから他の商品の使用価値で感覚的に現われねばならないと理解してはならないということである。何故ならば、価値と価値形態との内在的關係を超感覚的な定在と感覚的な定在との関係として把握するならば、価値という社会的定在とその現象形態をなす使用価値という自然的定在との転倒的な関係に特有な核心的問題が完全に見失なわれてしまうからである。

- (3) よく知られているように、「5台の寝台＝これこれの額の貨幣」（*Kapital*, I, S. 73）というのは「5台の寝台＝1軒の家」（*ibid.*）というのと「違わない」（*ibid.*）ことを鋭く看破し、貨幣形態を単純な価値形態に帰着させて二商品の価値関係がその実単純な価値形態にほかならないことを見抜いたのはアリストテレスその人であった。「アリストテレスがまず第一に明言しているのは、商品の貨幣形態は、ただ、単純な価値形態のいっそう発展した姿、すなわちある商品の価値を任意の他の一商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないということである。」（*Kapital*, I, S. 73）つまり、アリストテレスは、「価値概念の欠如」（*ibid.*,

S. 74) にもかかわらず、「5台の寝台＝これこれの額の貨幣」において貨幣が寝台に対して価値そのものを表わす以上、これと同一の形態にある「5台の寝台＝1軒の家」においても家は寝台に対して価値そのものを代表し、従って、後者は前者の最も単純な形態たることを形式論理的な思考方法にもとづいて探りえたのである。それ故に、二商品の価値関係からの単純な価値形態の析出それ自体、換言すれば、二商品の価値関係には貨幣形態の原基形態たる単純な価値形態が包含されていることの確認それ自体はマルクス以前に既にアリストテレスにおいて基本的に解決済みであり、マルクスの独自の功績は価値概念という根本的基礎上に価値形態との内面的連絡関係をつけえた点に存在するのである。なお、この点については更に第三節注(2)を参照されたい。

第二節 価値概念の定立—価値表現の必然的根拠

はしがきで述べたように、本稿の中心課題は価値形態を価値の内的必然的な現象形態として展開することにあるが、前節では本稿の中心課題解決の一方の論理的な前提として二商品の価値関係から単純な価値形態を抽出し、もって二商品の価値関係が貨幣形態の原基形態たることを明らかにしたのである。別言すれば、われわれは、前節において、「相対的価値形態の内実」の一方の理論的支柱をなす第三パラグラフの固有の課題が二商品の価値関係をもって貨幣形態の端初形態たる単純な価値形態と規定する点にあることを考察したのである。というのは、そもそもここでの根本問題をなす価値概念と価値形態との内面的連繋、つまり単純な価値形態の成立根拠を証明するには先ずもって二商品の価値関係がとりもなおさず貨幣形態の抽象的形態＝単純な価値形態をなす所以をあらかじめ先行的に論証していなければならないからである。ところが、価値形態とは「価値の必然的な表現様式または現象形態」(*Kapital*, I, S. 53)にほかならない。それ故に、価値の概念的把握にして曖昧であれば、価値の必然的現象形態としての価値形態はそれが上向的展開において説明されるべき価値という概念的基礎をもたない根なし草とならざるをえない⁽¹⁾。従って、価値形態を価値の必然的現象形態として説く他方の論理的な前提は価値概念の定立にある。それ故に、本節では価値形態の基底に宿る価値概念を定立する。これに

よって同時に価値が何故に価値形態として現象しなければならないのか、つまり価値表現の必然的な根拠もまた明らかになる。

上述の通り、価値形態は価値の必然的な展開形態として初めて概念的に把握されうるとするのが労働価値論の根本視角であるが、価値と価値形態との間に伏在する内在的關係把握に関して従来存在する不明瞭性の根本原因は社会的定在としての価値の概念的把握の曖昧性にある。換言すれば、抽象的人間労働そのものによって成り立つ価値が社会的定在をなす本質的所以にして不分明さがあるならば、そこから論理必然的に価値と価値形態との間に横たわる上向的な内面的關係把握における不明瞭性が生じるのである。その意味では、二商品の価値関係からの単純な価値形態の析出をもって価値と価値形態との内面的連絡関係の分析とみなす従来の取り違えは価値形態の基底に実在する価値の概念的把握における曖昧性の直接的な現象形態にほかならない。それゆえに、ここでは先ずもって抽象的人間労働の結晶としての価値が如何なる概念的な意味合いにおいて社会的定在たりうるのかの説明されねばならず、言い換えれば、価値とは抽象的人間労働の結晶である以上、価値の社会的定在たる所以を価値実体をなす抽象的人間労働そのものの特有の存在様式に内在的に見いださねばならないのである。価値が価値形態として発現しなければならない必然的な根拠もまた価値が社会的定在をなす所以それ自体に即自的に内包されているからである。「商品の価値対象性は純粹に社会的であるということを思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないということもまたおのずから明らかである。」(Kapital, I, S. 62)そして、価値概念の根底的把握のためにはさしづめ共同的生産との対比においてその正反対の生産形態をなす商品生産に限って何故に労働が価値に表わされるのか、その理論的根拠から説明を始めねばならない。

既に詳論済みであるように(拙稿[11])、生産形態が共同的である場合には個別的な労働力が社会的総労働力の有機的な一成分として位置付けられており、従って、その個別的な労働力の特定の生産的支出である具体的労働はそのまま「労働の直接に社会的な形態」(Kapital, I, S. 91)として存在する。

つまり、共同的生産における具体的労働はそれがもたらす生産物の使用価値的特殊性に関係なくその現物形態そのものが社会的労働の直接的な姿態をなし、それゆえに、生産物に支出される労働量もまた具体的労働の継続時間によって計測されることで社会的総労働が計画的にして均衡的に生産諸部面に配分されるのである。まさしく、共同的生産では「継続時間によって計られる個人的労働力の支出は、ここでははじめから労働そのものの社会的規定として現われる」(*Kapital*, I, S. 92) ののである。ところが、これに反して、共同的生産と正反対の生産形態をなす商品生産の場合には個別的労働力は本来的に社会的総労働力の有機的な一成分として位置付けられておらず、従って、その生産的発揮である特定の具体的労働は社会的労働の直接的な形態をなさず社会的労働の反対物たる私的労働であるにすぎないのである。換言すれば、商品生産労働はその具体的労働の形態においては社会的労働の形態として普遍的に通用しないのである。それゆえに、私的な具体的労働はそれとは別個に社会的労働の独自の形態をもたねばならない。何故ならば、共同的生産の場合には具体的労働が直接的に社会的労働の形態たりうるために社会的総労働が社会的分業を構成する生産諸部面へ比例的に配分される際にそのままその社会的機能の担い手たりうるのであるが、しかし、商品生産の場合には社会的分業が均衡的に営まれねばならない必要性に反して具体的労働は単なる私的労働にすぎず、従って、釣り合いのとれた社会的分業の必要性は具体的労働とは別個の社会的労働の独自の形態、普遍的に妥当する社会的労働を根本的基礎にして初めて実現されるからである。

それでは、私的な具体的労働は如何にして社会的労働の独自の形態に表わされるのであろうか。言い換えれば、私的な具体的労働とは別個の社会的労働の独自の形態とは一体何であろうか。この問題究明に際して銘記さるべき要点は、商品生産の基礎上では「互いに無関係に営まれる私的諸労働の素材的な関連は、ただ、それらの諸生産物の交換によってのみ、媒介され、したがってまた実現される」(*Kapital*, 1. Aufl., S. 771, 傍点—マルクス) のであるから、私的な具体的労働に独自の形態の社会的労働は具体的労働が対象化された形態で

相対する交換関係においてのみ範疇的に成り立ちうるということである。商品生産の基礎上では交換部面に限って相互にズタズタに分断され独立的に営まれる私的な具体的諸労働が社会的に関係付けられるからである。「生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。」(*Kapital*, I, S. 87) しかし、先に述べた通り、具体的労働はたとえそれが対象化された形態にあっても依然として私的労働にすぎないのである。それゆえに、第四章「貨幣の資本への転化」において措定された、「資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に流通のなかで発生してはならない」(*Kapital*, I, S. 180) という資本の一般的定式 $G-W-G'$ の内在的矛盾を想起させるこのような現実的困難が止揚されうる仕方は唯一、次のような前提条件を満足する以外にありえないのである。先ず第一に、私的な具体的諸労働が社会的に関係付けられるのは諸生産物の交換部面の基礎においてのみのことだから、具体的諸労働の社会的通用性は具体的諸労働が物質化した形態において相対する交換関係に限って表わされるはずである。これが先の現実的困難が止揚されるための根本前提である。ところが、第二に、物質化した形態にある具体的労働はその現物形態のままでは依然として社会的妥当性を欠く単なる私的労働の形態にすぎないのであるから、社会的労働の独自の形態は具体的労働とは別個の異なった形態になければならないのである。ここでは、問題解決の条件は同時に問題解決の方法にはかならない。即ち、諸使用価値に結果する具体的諸労働が相互に独立的に支出される私的諸労働として社会的通用性を欠くならば、具体的諸労働の社会的妥当性は具体的諸労働のもつ具体的な有用形態の相違如何にかかわりのない人間労働一般としての同等性にしかありえず、人間労働一般としての同等性は具体的諸労働の個性のない無差別一様な共通性格への還元には存在しないということ、これである。別言すれば、互いに独立的に営まれる私的な具体的諸労働に独自の社会的労働の形態は具体的諸労働のもつ具体的な有用形態が捨象された抽象的人間労働としての同等性にあり、この同等性によって表わされる私的労働の独自の社

会的性格が労働生産物に価値という特有な社会的極印を押しつけるのである。この意味において、価値とは「ある物に投ぜられた労働を表わす一定の社会的な仕方」(*Kapital*, 1, S. 97)であり、商品生産の基礎では「労働の一般的な社会的な性格の対象化は、まさに労働の生産物を交換価値たらしめる」(*Grundrisse*, S. 85)のである。これが古典派経済学者によっては提起すらされえなかった「なぜ労働が価値に表わされるのか」(*Kapital*, 1. Aufl., S. 41, 傍点—マルクス)という一基本問題に対してマルクスが第四節「商品の呪物的性格とその秘密」において与えた基本的証明にほかならない。

ところが、これまでの考察のうちに既に価値が社会的定在をなす本質的所以、従ってまた価値表現の必然的な根拠が即自的に含蓄されているのである。即ち、これまでの分析から先ず導出されることは、生産形態の相違如何によらず、人間が特定の目的、手段、対象をもって生産的に発揮しうる現実的労働は使用価値に結実する具体的労働そのものにほかならず、現実的労働として存在する具体的労働が直接的には私的労働にすぎないことから商品生産の基礎においてだけ具体的労働から抽象的人間労働という独自の形態にある社会的労働が分出し両者が対立的に区別されて「商品に表わされる労働の二重性」(第二節表題, 傍点—頭川)として定立されるということである。換言すれば、使用価値に表わされる限りでの具体的労働と価値に表わされる限りでの抽象的人間労働とを単に機械的に分裂させたまま区別するだけではマルクスの発見した労働の二重性把握としては決定的に不十分だということであり、使用価値に結果する具体的労働こそ人間が特定の目的、手段、対象に規定されて生産的に支出しうる唯一の実在的労働であって、価値に結果する抽象的人間労働は実在的労働としての特定の具体的諸労働のもつ具体的な有用形態を相互にことごとく捨象したうえでその相互関係の基底に最後に残される抽象的な定在だということである。つまり、労働の二重性とはいうまでもなく同一労働の二面的規定であるが、同一労働とはほかならぬ具体的労働なのである⁽²⁾。「リカードの場合には、使用価値に表わされるかぎりでの労働と交換価値に表わされるかぎりでの労働との混同が一貫して見られる。もちろん、労働のあとのほうの形態は、た

だ、前のほうの労働を抽象的な形態で把握したものにはすぎない。」(Mehrwert, III, S. 136) そこで、これまでの分析からしてさしあたり具体的労働と抽象的人間労働との立体的関連が明確化するならば、価値実体をなす抽象的人間労働が「社会的実体 (gesellschaftliche Substanz)」(Kapital, I, S. 52) と規定される際の「社会的」が内蔵する固有の概念的意味はおのずから明白である。つまり、先刻強調したように、商品生産に特有な社会的労働の形態たる抽象的人間労働は諸生産物に物質化された形態で相対する具体的諸労働がその不等性を捨象される独自の相互関係のうちのみ成り立っており、それゆえに、抽象的人間労働は「社会的実体」なのである。あるいは別の言葉でいえば、抽象的人間労働は、交換部面で相対する千差万別の具体的諸労働の相互関係それ自体をもってその特有な存在様式としており、従って、具体的諸労働の相互関係において千差万別の具体的有用的な諸属性という不等性が捨象されるその基底に抽象的にのみ成り立つがゆえに一分子の自然素材も含有しない純度 100% の社会的概念たりうるのである。「労働の無差別な単純性とは、さまざまな個人の労働の同等性であり、彼らの労働が同等なものとして、しかもすべての労働が同等な労働に事実上還元されることによって相互に関係しあう」(Kritik, S. 19, 傍点—マルクス) ことだからである。従って、マルクスが価値実体たる抽象的人間労働を「社会的実体」規定する際の「社会的」とは独自の概念的な意味合いでの社会性を指し、抽象的人間労働が千差万別の具体的諸労働の相互関係をもってその特有な存在様式としている点にこそ「社会的」たる最奥の理由が実在する。マルクスの次の一文はこのことを力説したものにはほかならない。「交換価値を生み出す労働の諸条件は、……労働の社会的諸規定または社会的労働の諸規定であるが、社会的 (gesellschaftlich) といっても一般的に社会的だというのではなく、特殊なあり方での社会的である。それは特殊な種類の社会性である。」(Kritik, S. 19, 傍点—マルクス) ここからすれば、抽象的人間労働の結晶たる価値が社会的定在をなす究極的理由もまた抽象的人間労働の特有の存在様式に求められねばならないことは一目瞭然というべきであろう⁽⁵⁾。そして、以上において考察した価値が社会的定在をなす本質的所以は同

時に価値表現の必然的根拠でもあり、両者は一体である。というのは、商品生産においては「別々な諸個人の労働……の關係そのものが諸労働の独自に社会的な形態として認められる」(*Kapital*, 1. Aufl., S. 32, 傍点—マルクス)のであるから、使用価値と価値との二重物たる商品はその現物形態において具体的労働の所産たることを表わしているにすぎず、従って、商品は具体的労働を表わすその現物形態とは別個の形態において抽象的人間労働の純粹な所産として現われねばならない必然性がこれまでの考察のうちに内包されているからである。別言すれば、ある商品に物質化された私的な具体的労働はその現物形態において抽象的人間労働という商品生産に独自の社会的労働の形態をなしてはならず、それ故にこそ、私的な具体的労働に潜在する抽象的人間労働はその現物形態とは別個の具体的な形態で社会的労働の独自の形態たる抽象的人間労働として現出しなければならないのである。ここに価値が必然的に価値形態として現象すべき究極的根拠がある⁽³⁾。まさしく、「個人の労働を一般的労働として表示するこの必然性は、一商品を貨幣として表示する必然性である。」(*Mehrwert*, III, S. 133)

以上、われわれは、本節において、価値が純粹に社会的定在をなす本質的所依を価値実体たる抽象的人間労働それ自体の特有な存在様式に見だし、もって社会的定在として定立された価値概念から価値表現の必然的な根拠を内在的に導出した⁽⁴⁾。

(1) いうまでもなく、価値形態をその根底に潜む価値という根本的基礎抜きに考察した代表論者はS. ベーリにはかならない。

「一商品の価値は、ある他の商品の量によって以外には、これを指示し、または表現することは不可能である。」([9]44ページ)

周知の通り、ベーリにとって価値とは或る使用価値が他の使用価値と交換される量的割合そのものであったが、ベーリは上記の引用文にみられるその表面的な理由付けによって交換価値という現象形態の基底に価値という本質を見いだすことを拒絶し、従ってまた、「同じ商品価値の種々雑多な相対的表現を指摘することによって、価値の概念規定をすべて否定し去ったと妄信し」(*Kapital*, I, S. 77)たのである。この点では価値概念を峻拒して一面的に価値形態に固執したベーリは、価値の量的規定性にのみ眼が奪われ価値と価値形態との間の内面的連絡関係を不問に付したりカー

ドとは文字通り対極的な位置にある。だからこそ、マルクスは、木質としての価値から現象形態としての価値形態を上向的に展開しえなかつたりカードを批判する一方、その返す刀でもって、他方において現象形態としての価値形態の根本的基礎に宿る本質としての価値をくつがえそうと試みたペーリを切り、もって両面批判を展開したのである（*Mehrwert*, III, S. 122—145）。いうまでもなく、リカードとペーリに代表される両翼の謬論は、マルクスが経済学史上初めて真に定立した社会的定在としての価値概念に立脚することによってのみ根本的に止揚され、最終的な決着がつけられたのである。つまり、リカードとペーリとはその主張点においては正反対であるが、価値概念の欠如という点では同一土俵上にあり、これがため相互に対極的な誤謬が産出されたのである。

- (2) このように、マルクスにあっては、一方の使用価値に結実する具体的有用労働とは単に他方の価値に結実する抽象的人間労働に対立するのみならず、抽象的人間労働に還元される以前の実在的労働そのものにはかならないが、従来、具体的有用労働と抽象的人間労働とは分断されたままに把握され、二重的形態にある労働の立体的な関連はともすれば等閑に付されがちであった（拙稿〔11〕第一節をみよ）。思うに、このような一種の理論的偏向は抽象的人間労働＝超歴史的範疇説の根深い影響力に起因する。何故ならば、超歴史的範疇説に従えば、すべての労働は超歴史的に二つの違った種類の労働からなり、それ故に、二重的形態にある労働は常に機械的に分裂した定在としてしか把握されえないからである。既に拙稿〔〔11〕第一節〕において指摘したように、われわれの理解によれば、人間労働は超体制的に二種の異なる労働から成り立つとする超歴史的範疇説の躓きの石は二つある。その第一は、共同的生産における具体的有用労働をその現物形態のままに「直接に社会的化された労働」（*Kapital*, 1, S. 92）と規定するマルクスの基本命題把握の不分明さにあり、その第二は、人間労働が歴史貫通的に二種の労働によって成り立つとすれば、論理的に考えて、同一労働の二重性概念は成立の余地がないという単純な事柄の閑却にある。まさしく、商品生産の基礎上では「同じ労働が、その労働の生産物としての商品の使用価値に関連して見られるか、それとも、その労働の単に対象的な表現としての商品価値に関連して見られるか、によって、違った規定を受ける」（*Kapital*, 1. Aufl., S. 13, 傍点—マルクス）にすぎず、「商品のなかには、もちろん、二つの違った種類の労働が含まれているわけではない」（*ibid.*）からである。振り返っていえば、抽象的人間労働＝歴史的範疇説は、商品生産に限って具体的有用労働が同時に抽象的人間労働を分出せしめると説くのであるから、ここには即自的に具体的有用労働こそ唯一の現実的労働であるという正当な見解が含蓄されているのである。従って、二重的形態にある労働の立体的関連把握は抽象的人間労働＝歴史的範疇説を単に論理的に反省したものにすぎないのである。

- (3) それ故に、価値の社会的定在たる所以、従ってまた価値表現の必然的根拠に関する

これまでの議論を『資本論』第I巻第一章「商品」の論理展開に即していえば、マルクスはその第一節「商品の二つの要因 使用価値と価値」において先ず商品の二要因として使用価値と価値とを析出し、しかるうえで第二節「商品に表わされる労働の二重性」において価値実体をなす抽象的人間労働が交換関係にある諸使用価値に体化された種々の具体的労働相互間で不等性が捨象される特有な存在様式のうちのみ成り立つことを究明することで抽象的人間労働をもって唯一の構成要素とする価値が分子の自然素材をも含有しない社会的定在たることを最終的に確定するのである。いうまでもなく、マルクスは、第一節において、二商品の交換関係から先ず使用価値を捨象し、それと同時にこの使用価値の捨象という手続きのうちに対象化された具体的労働の具体的な属性もまた捨象されているとし、そのうえで価値実体としての抽象的人間労働を抽出したのであるから、この抽象手続きのうちに即自的に価値実体としての抽象的人間労働は異種の具体的諸労働の相互関係の基底のみ実存しうることが内包されており、だからこそこの第一節において抽象的人間労働を「社会的実体」(*Kapital*, I, S. 52)と規定しえたのであるが、しかし、ここでは未だ商品の二つの要因が二重的な形態にある労働と概念的に関係付けられておらず、具体的労働と抽象的人間労働との論理的関係が明示的に分析されていないことからいって、第二節に至って論述のうえで終局的に価値が社会的定在をなす所以従ってまた価値表現の必然的根拠が指定されていると考えるべきであろう。それゆえに、第一節と第二節とが相俟って第三節「価値形態または交換価値」に上向的脈絡をもって連絡しているのであり、ローゼンベルグのごとく「第三節『価値形態または交換価値』は、第一節『商品の二要因……』の直接の続きである」([10] 124ページ)という主張は不正確な理解といわねばならないのである。けだし、ローゼンベルグ流の見解では抽象的人間労働の結晶としての価値が何故に社会的定在であるのか、価値は何故に価値形態として必然的に現象しなければならないのかは必ずしも明瞭ではなく、この設問に対する回答はその著作からは読みとりがたいからである。この意味で、第二節「商品に表わされる労働の二重性」把握は労働価値論の原点に位置する価値概念把握の真髄であり、従って、文字通り「経済学理解にとっての決定的な跳躍点」(*Kapital*, I, S. 56)をなすのである。

- (4) 以上の内在的な考察を踏まえるならば、古典派経済学に固有な理論的限界性が何故に必然的に露呈せざるをえなかったのかは推測するにたたくない。すなわち、「古典派経済学の根本欠陥の一つ」(*Kapital*, I, S. 96)が「価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけたことに成功しなかった」(*ibid.*)点にあることはよく知られた事実であるが、たとえば「労働時間による交換価値の規定を最も純粋に定式化し」(*Kritik*, S. 46)えた古典派経済学の完成者たるリカードでさえ「価値と価値形態または交換価値との内的関連」(*Kapital*, I, S. 98, 傍点一頭川)を究明しえなかった根本原因は、リカードが商品生産を社会的生産の永遠の自然

形態と見誤り、それがため商品生産労働を共同的労働と同様に直接に社会的な労働の形態と観念したことにあった。というのは、商品生産を社会的生産の特殊歴史的な一形態として把握する理解に欠落するならば、労働生産物の独自に社会的な形態たる商品形態の独自性を見失ない、共同的労働に対する商品生産労働の差別性を看過し、その論理必然的な帰結として特定の生産形態の場合に限って労働が何故に価値に表わされざるをえないのかという問題意識さえもちえないことにならざるをえないからである。そして、商品生産においてのみ労働が価値に表わされる必然的な根拠に関する問題の所在認識にして空白であるならば、この問題意識の欠落は同時に社会的定在としての価値概念把握の根本的欠陥に通じるのである。因みにリカードの場合には使用価値に表わされる限りでの労働から事実上無意識的に価値に表わされる限りでの労働が区別されたにしても価値に表わされる限りでの労働はそれ自体直接に社会的労働の形態をなす共同的労働と無区別の永遠の社会的労働の形態として意識されたにすぎないのであった。「リカードは、労働のブルジョア的な形態を社会的労働の永遠の自然形態だとみなしている」(*Kritik*, S. 46)というマルクスのリカード論評はこの意味に解されねばならない。それゆえに、リカードをその理論的頂点とする古典派のこのような無概念的な価値把握からするならば、一方の「絶対的価値 (absolute value)」(リカード〔8〕24ページ)はおろか他方の「相対的価値 (relative value)」(同ページ)もまた自明の自然必然性をもって受け取られたのは至極当たり前であり、その結果、「絶対的価値」は何故に「相対的価値」として発現しなければならないのかと設問されることもなく「絶対的価値」と「相対的価値」との間に橋渡ししがたい論理的断絶が生み落とされる羽目になってしまったのである。それだから、古典派経済学における価値と価値形態との間の論理的亀裂の究極的な発生根拠は商品生産が社会的生産の永久的な絶対的形態として固定的に観念された点にあり、この固定観念が古典派をして価値の無概念的把握に陥らせる結末を招来せしめたのである。マルクスが第四節「商品の品物的性格とその秘密」の注②において「労働が何故に価値に表わされるのか」というそこでの主題と一見縁遠いような、従って、本来第三節において論及されてしかるべしと思われる価値と価値形態との概念的関係に関する古典派経済学の理論的欠陥を指摘している真の理由はここにある。

第三節 価値と価値形態との内在的關係

われわれはこれまでの論理展開において、価値と価値形態との間に伏在する内在的關係如何という本稿の中心課題解決の一方の論理的前提として、二商品の価値関係のうちから貨幣形態の原基形態たる単純な価値形態をえぐりだし、

他方の論理的前提として価値形態の基底に潜む価値概念を定立したのである。まさしく、「分析は発生論的叙述の、すなわち種々な段階における現実の形成過程の理解の、必然的な前提であ」(Mehrwert, III, S. 491) った。ところが、翻って反省してみると、これまでに分析した本質としての価値と現象形態としての価値形態との間には概念上天地の隔たりが実在することに気付くのである。何故ならば、価値は諸商品に物質化された具体的諸労働相互間の基底にのみ関係概念として成り立つ抽象的人間労働を唯一の構成要素とする社会的定在であるのに反して、その現象形態は一八〇度正反対の性格をもつ使用価値という自然的定在であり、両者の内的依存関係はそれ自体としては露呈していないからである。換言すれば、単純な価値形態には既に即自的に「労働の一般的な社会的形態が貨幣において物の属性として現われる」(Mehrwert, I, S. 365) 摩訶不思議さが内包されているのである。まさに、ここにこそ、すべての価値形態が孕む不可解さが存在する。そこで、本節では、これまでに分析した価値と価値形態との間に隠蔽された内面的な連絡関係を考察し、現象形態としての価値形態を本質としての価値から首尾一貫して発生論的に展開する。この理詰め分析によって神秘的なヴェールにおおわれた価値と価値形態との真の概念的な関係が明らかになる。

商品生産に独自の社会的労働の形態をなす抽象的人間労働によってのみ成り立つ価値という社会的定在は如何なるメカニズムに立脚して一点の共通性ももたない使用価値という自然的定在でもって逆立ちして現われうのか。この転倒的な現象発生の最深の基礎は、価値表現の必然的な根拠から考えて、ある商品に物質化された潜在的な抽象的人間労働が投下された具体的労働とは別個の具体的な形態で顕在的に抽象的人間労働として現出しなければならないという点にあり、これが価値形態の秘密を解き明かすべき本節の分析の出発点である。従って、本節では、ある商品に物質化された潜在的な抽象的人間労働が投下された具体的労働とは異なった形態で顕在的に現象しなければならないという場合、その潜在的な抽象的人間労働は如何なる具体的な定在によって顕在的に現出しうるのが先ずわれわれの当面する第一の問題である。何故ならば、

前節では、ある商品に体化された潜在的な抽象的人間労働はそれに結実した具体的労働とは別個の感覚的な形態で顕現しなければならない論理的必然性が指定されたに留まり、潜在的な抽象的人間労働が顕在化するまさにその問題の鍵を握る別個の表現材料が如何なる具体的定在であるのかについては真正面から分析されていないからである。先回りしていえば、まさしく逆説中の逆説であるが、ある種の商品に体化された潜在的な抽象的人間労働が顕在化しようとするれば別種の商品に体化された具体的労働をその現象形態とする以外に如何なる方法も存在しないのであり、ある種の具体的労働に相対する別種の具体的労働がその具体的な形態のまままで抽象的人間労働の直接的な実現形態に昇華することによってのみ、潜在的な抽象的人間労働は顕在的に現われうるのである。ところが、この第一の問題の解決は、更に、ある種の具体的労働と別種の具体的労働との相互関係の下で、ある種の具体的労働に相対する別種の具体的労働が何故に抽象的人間労働の直接的な実現形態としてみなされうのかという第二の問題の解決を要求する。何故ならば、第一の問題の解決は別種の具体的労働によってのみある種の具体的労働は同時に抽象的人間労働として具体化されるということを明らかにしはするが、しかし、別種の具体的労働がある種の具体的労働との等置関係におかれた場合、何故にその正反対物たる抽象的人間労働の直接的な実現形態とみなされうのかという設問には確定的な回答を与えないからである。それ故に、ここでは概念上区別して考えられるべき二つの相異なる問題を以下において徹底的に分析しなければならない。ある特殊な具体的労働に潜在する抽象的人間労働は他の特殊な具体的労働を通じてのみ現象しうる理論的根拠が明確化するならば、価値形態にまつわる根本的な謎は既にその核心において神秘のヴェールがはがされているのである。

第一の問題。ある特殊な具体的労働に伏在する抽象的人間労働は如何なる具体的定在を通じて現出しうるのであろうか。いうまでもなく、この設問に対して、例えばリンネルに体化された抽象的人間労働は上衣の使用価値という自然的定在によって直接的に現象しうると回答するならば、これは問題の所在そのものを見失なった回答というべきである。織布と裁縫という二つの特殊な具体

的労働相互間の基底に関係概念としてのみ成り立つ抽象的人間労働という社会的定在が一八〇度正反対の性格をもつ使用価値という自然的定在で短絡的・無媒介的に現出しようとするならば、もともと問題それ自体従ってまた価値形態の不可思議さは存在せず、先の回答は事実上織布に潜在する抽象的人間労働が織布労働と上衣の使用価値との共通物として成り立っているという発想の上になされているに等しいからである。それ故に、われわれは、問題の性格上、商品生産に固有な社会的労働の形態をなす抽象的人間労働の一種独特な実存様式に再び立ち返らねばならないのである。即ち、前節で究明したように、抽象的人間労働の特有な存在様式とは交換関係において相対する諸商品に物質化された具体的諸労働の相互関係そのものにはかならず、千差万別の具体的諸労働がもつ不平等な具体的諸形態の捨象のうちのみ抽象的人間労働が成り立つのであった。「私的諸労働の社会的な形態とは、同じ労働としてのそれらの相互の関係である。つまり、千差万別のいろいろな労働の同等性はただそれらの不平等の捨象においてのみ存在しうるのだから、それらの社会的な形態は、人間労働一般としての、人間労働力の支出としての、それらの相互の関係である。」(Kapital, 1. Aufl., S. 32, 傍点—マルクス) 従って、ここからいふことは、織布労働の現物形態は単に特殊な具体的労働にすぎず、抽象的人間労働は織布労働と裁縫労働という相異なる二つの特殊な具体的労働の相互関係のうちのみ成り立つ以上、一方の織布労働に潜在する抽象的人間労働は他方の裁縫労働でのみ現出しうる以外に如何なる表現方法も存在しないということである。換言すれば、問題の肝腎かなめの要訳は、抽象的人間労働という特有な定在が織布労働と裁縫労働という相異なる二つの具体的労働の相互関係のうちのみ成り立つという点にあり、だからこそ、一方の織布労働の現物形態が単なる特殊な具体的労働を表わすときには他方の裁縫労働の現物形態は如何に逆説的であれその現物形態のままに抽象的人間労働の現象形態に成り上がらざるをえないのである。従って、ここでは、後ほど詳論するように、別種の具体的労働がその現物形態のままに或る具体的労働に対して抽象的人間労働の直接的な実現形態に転じるという「取り違え」(Kapital, 1. Aufl., S. 771) が生

じ、この点にこそマルクスも認めている通り「価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の枢軸」(ibid., S, 19)が横たわっているのであるが、しかし、そもそも商品生産労働は一つの例外もなくすべて特殊な具体的労働にすぎないのであるから、ある特殊な具体的労働が同時に抽象的人間労働として現出しなければならない場合には別の特殊な具体的労働が両者の相互関係の基底に成り立つ抽象的人間労働の受け皿とならざるをえない宿命にある。つまり、ここでの取り違えの難解さは別の具体的労働がその現物形態のままでもる具体的労働に対して抽象的人間労働の直接的な実現形態に転変し、もともと同格であった二つの特殊な定在のうちの他方の特殊な定在がその特殊な形態を保持したままで一方の特殊な定在に対立して両者に共通する一般的な定在を直接的に代表するという点にあるが、ここでは価値形態の完成形態つまり金商品以外のすべての商品の価値が金の使用価値で表わされる貨幣形態にあって金以外のすべての商品に体化されたすべての特殊な具体的労働が金に体化された産金労働という一つの特殊な具体的労働でもって抽象的人間労働として現われることに思いを至すならば、この取り違えは実をいうと貨幣形態の内面に完成した形態で含蓄されている内在的関係を純論理的に把握したものにすぎず、前者は後者が含む全面展開し切った内在的関係をただ縮約して表示しているだけだということは明瞭である。それ故に、二商品の交換関係にあっては、ある特殊な具体的労働に潜在する抽象的人間労働は別の特殊な具体的労働を表現材料として現象せざるをえないのである⁽¹⁾。

第二の問題。しかし、以上の第一の問題の考察では未だ、二つの特殊な具体的労働の等置関係において何故に他方の特殊な具体的労働が一方の特殊な具体的労働に対立して抽象的人間労働の直接的な実現形態とみなされうのかには直正面から答えられていないのである。一体、織布労働との相互関係において裁縫労働は何故にその具体的形態のままでもる抽象的人間労働の特定の実現形態たりうるのであろうか。この第二の問題解決は実は第一節における二商品の価値関係からの単純な価値形態の析出の分析の単なる応用問題にすぎないのである。即ち、第一節における単純な価値形態の析出の考察によれば、価値関係に

あるリンネルと上衣とはその現物形態のまま価値として直接的な同一性をもつのであったから、このことはつまるところリンネルに物質化された織布労働と上衣に物質化された裁縫労働とがその具体的形態のまま等置されているということである。何故ならば、そもそも諸商品の交換関係とは或る具体的労働と別の具体的労働との交換に帰着するからである。従って、リンネルの使用価値が上衣の使用価値を等価物とする等置関係はその実、織布労働が裁縫労働をその具体的形態のまま直接的に同等とみなす等置関係である。ところが、織布労働と裁縫労働とが同等でありうるのは両者のもつ具体的有用形態が事実上捨象されたうえでのことである。つまり、織布労働と裁縫労働との直接的な同等性関係において最大限着目すべきは、両者がその現物形態を保持したままなおかつ相互に抽象的人間労働として完全に同一な定在と認め合うという点にある。けだし、織布労働と裁縫労働とがここでその具体的有用形態をともに捨象されたうえで本質的に抽象的人間労働として同等であるというならば、両者をわれわれの分析によって織布労働でも裁縫労働でもない共通の第三者としての抽象的人間労働に還元するだけで、リンネルと上衣とが等価物として実在する等置関係の基礎上での織布労働と裁縫労働との関係をそのありのままの関係に即して把握していないことになるからである。それ故に、織布労働＝裁縫労働という関係においては両者はその具体的有用形態のままなおかつ抽象的人間労働として妥当し合うのである。ところが、そうだとすれば、一方の織布労働にとっては抽象的人間労働としてはその具体的現物形態のまま裁縫労働と任意に自由自在に置き換え可能だということになる。何故ならば、無差別一様な人間労働一般としての抽象的人間労働にとってはそれが如何なる具体的有用形態で現われようとどうでもよいからである。それ故に、ここからすれば、織布労働はその現物形態において具体的労働しか表わしえないのに反して、抽象的人間労働としては織布労働と直接的な同一性をもつ裁縫労働はその現物形態のまま織布労働に対して抽象的人間労働を代表しうることは論理必然的である。つまり、ここでは、織布労働と裁縫労働との関係を両者がその現物形態のまま抽象的人間労働として直接的に同一だと認め合う関係として把握する

ことがクリティカル・ポイントなのであり、これを承認するならば、裁縫労働は織布労働に対して抽象的人間労働という両者に共通な社会的性格においてのみ直接的に等置されているのであるから、裁縫労働は織布労働にとって「抽象的人間労働の単なる実現形態」(Kapital, I, S. 72)としてのみ存在意義をもつことは不可避的なのである。それ故に、ここでは、「抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態として認められる」(Kapital, 1. Aufl., S. 771)ところの「転倒(Verkehrung)」(ibid.)の発生は自然必然的である。換言すれば、ここで銘記すべきは、抽象的人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められ、裁縫労働という具体的有用形態はただ単に抽象的人間労働という本質的定在の現象形態としてだけ認められるということにある。けだし、われわれがここで価値形態の最高の発展形態をなす貨幣形態を思い浮かべるならば、この貨幣形態においては貨幣商品金に結晶する産金労働という一つの特殊な具体的労働が産金労働以外のあらゆる特殊な具体的労働と共通する抽象的人間労働の一般的な現象形態として君臨しており、従って、ここでは産金労働という具体的労働のもつ特殊な性格は産金労働が直接的に代表する抽象的人間労働という一般的な性格に後景に退いていることは手にとるように明らかだからである。

かくして、織布労働と裁縫労働との直接的な同等性関係は、その実、一方の織布労働にとって他方の裁縫労働が抽象的人間労働の特定の実現形態として認められる関係にはかならず、従って、マルクスが『経済学批判要綱』において「一般的なものは、一方ではただ観念上の種差であるが、それは同時に、特殊なものや個別的なものの形態とならんで、一つの特殊な現実的形態である」(Grundrisse, S. 353, 傍点—マルクス)と明言しているように、ここでは裁縫労働という商品生産労働の「一つの特殊な現実的形態」が織布労働との相互関係の基底に成り立つ「一般的なもの」としての抽象的人間労働の特定の実現形態に昇華する取り違えが生まれるのである。マルクス自身のコンパク

トな表現を借りていえば、リンネルと上衣との交換関係において「織布はその織布としての具体的形態においてではなく人間労働としての一般的属性においてリンネル価値を形成するのだということを表現するためには、織布にたいして、裁縫が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的労働が、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置される」(*Kapital*, I, S. 72—3)のである。

ところで、そもそも価値形態の根本的な摩訶不思議さは、抽象的人間労働を唯一の構成要素とする価値という社会的定在がそれ自体としては無縁な関係にある使用価値という自然的定在をその現象形態となす一八〇度正反対の転倒性にこそあった。それ故に、ここではなお、織布労働に対して裁縫労働が抽象的人間労働の直接的な実現形態として現われる内在的關係が、何故にリンネルの使用価値に対して上衣の使用価値が価値の直接的な実現形態として現われる短絡的な外在的關係に転倒するのかという価値形態の真の謎の最終的な詰めを行なわねばならないのである。即ち、これまでに考察したように、織布労働はその二面的な性格を自己の現物形態と裁縫労働の現物形態とで対極的に配分して表わすのであるが、しかし、織布労働と裁縫労働との直接的な同等性関係は両者がリンネルと上衣とにそれぞれ物質化された形態での関係にほかならず、織布労働にとって抽象的人間労働の具体化として現われる裁縫労働は現実的には上衣の使用価値としてのみ実在するのである。「特殊な現実的労働は諸商品の使用価値として現実に存在する。」(*Kritik*, S. 53) 従って、交換関係にあるリンネルと上衣との本質的な内在的關係は裁縫労働が織布労働に対して抽象的人間労働の直接的な実現形態として相対する関係であるにもかかわらず、この場合、裁縫労働は上衣の使用価値としてのみ現実的な定在たりうるのであるから、織布労働に潜在する抽象的人間労働の直接的な実現形態をなす裁縫労働は上衣の使用価値として眼前に立ち現われざるをえないのである。換言すれば、価値とは物質化された抽象的人間労働であるから、裁縫労働が単に織布労働に潜在する抽象的人間労働の直接的な実現形態として昇華するだけでは画龍点睛を欠くのであり、抽象的人間労働に還元される織布労働は物質化された形

態で初めて価値を形成する以上、織布労働に潜在する抽象的人間労働の直接的な実現形態をなす裁縫労働もまた物質化された形態つまり上衣の使用価値という物体形態にあってのみ初めてリンネル価値の現象形態たりうるのである。かくて、織布労働と裁縫労働との内在的關係はリンネルの使用価値と上衣の使用価値とが交換される量的関係、つまり単純な価値形態という不可思議な外在的關係として現出する。

以上要するに、われわれはこれまでの論理展開において理論的な分析対象として二商品の価値関係から析出した単純な価値形態が指し示す価値と価値形態との間に横たわる概念上の天地の距離を、ある具体的労働に潜在する抽象的人間労働が別の具体的労働を通じて現象する論理的な媒介項で埋め、価値と価値形態との短絡的な関係のうちに秘められた両者の内面的な連絡関係を解明したのである。ここで振り返っていうと、単純な価値形態において「等価物として役立つ商品の身体は、つねに抽象的人間労働の具体化として認められ」（*Kapital*, I, S. 72, 傍点一頭川）、自然素材と具体的労働という二要素の結合物である上衣の使用価値が不思議なことにリンネルの使用価値に対して純粹に「抽象的人間労働の感覚的に存在する物質化」（*Kapital*, 1. Aufl., S. 22）、「直接的に社会的労働の物質化」（*ibid.* S. 31）として現われるのは、裁縫労働が織布労働に対して抽象的人間労働の直接的な実現形態に転化する関係こそリンネルの上衣に対する価値関係の本質であるからにほかならない。換言すれば、織布労働の裁縫労働に対する関係にあっては、上衣の使用価値は、自然素材と裁縫労働という二つの要素の結合物であるにもかかわらず、抽象的人間労働の直接的な実現形態としての裁縫労働の素材的担い手として実存し、それ故に、純粹に抽象的人間労働の直接的な物質化として立ち現われるのである。まさしく、「リンネルは、人間労働の直接的な実現形態としての裁縫労働に関係することなしには、価値または肉体化した人間労働としての上衣に関係することはできない」（*ibid.*, S. 19, 傍点一マルクス）のである。

ところが、マルクスが二商品の価値関係から単純な価値形態を析出した「相対的価値形態の内実」の第三パラグラフの論述を受けて価値と価値形態との間

に隠蔽された内的な紐帯をえぐりだしたのはその第五・第六パラグラフにおいてにほかならない。さしづめ第五パラグラフの主要部分を引用すると以下の通りである。

「上衣が価値物としてリンネルに等置されることによって、上衣に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、たしかに、上衣をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上 (tatsächlich)、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。」(Kapital, I, S. 65)

みられるように、マルクスは、ここで、先ず第一に、リンネルと上衣との等価値物としての等置関係は帰する所織布労働と裁縫労働との直接的な等置関係なのだと言明し、そのうえで、第二に、両者がその現物形態の相違にもかかわらず直接的な同一性をもつ限りでは、それ自体具体的労働を表わす織布労働に対して裁縫労働はその現物形態のままで抽象的人間労働として妥当し、同じことだが、織布労働に潜在する抽象的人間労働は裁縫労働を通じて現われるのだと主張するのである。つまり、第五パラグラフの決定的な一文、「織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方の共通な性格に、還元する」のうち「事実上」とは、裁縫労働がその具体的有用形態を捨象されることなくその現物形態のままでということの意味し、「還元する」とは一般に多くの諸規定の総括として実在する具体的なものをその基底に伏在する抽象的なものに帰着させることであるから、ここでは裁縫労働がその現物形態を保持したままで織布労働の基底に伏在する抽象的人間労働の現象形態に帰一することが強調されているのである。ところが、マルクスによれば、織布労働に潜在する抽象的人間労働は流動状態においてではなく文字通り凝固状態において初めて価値に表わされるのであるから、織布労働に潜在する抽象的人間労働の現象形態をなす裁縫労働もまた凝固状態になければならないというのである。これが以下において引用する第六パラグラフの主旨にほかならない。

「しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自の性格を表現するだけでは、十分ではない。流動状態にある人間の労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するが、しかし、価値ではない。それは、凝固状態において、対象的形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な『対象性』として表現しなければならない。課題はすでに解決されている。」(Kapital, I, S. 65—6)

つまり、ここでは、織布という具体的労働に潜在する抽象的人間労働は対象的形態において初めて価値になるのであるから、その抽象的人間労働の特定の現象形態をなす裁縫労働もまた対象的形態でなければならぬとマルクスはいうのであり、第六パラグラフでは第五パラグラフにおける核心的分析が論理的に補完されていることは再説の必要のないほど明瞭である。

かくして、われわれは、これまでの全分析を通じて一見無関係に並立しているかに映じる価値と価値形態との間に内面的な連絡関係をつけたのである。そして、価値という抽象的概念から価値形態という具体的概念に上向するこれまでの発生論的な考察からいいうことは、価値という社会的定在が一八〇度正反対の性格をもつ使用価値という自然的定在で転倒的に現出する価値形態の真の秘密は一方の具体的労働に潜在する抽象的人間労働が他方の具体的労働を通じて現われる二つの相異なる具体的労働の相互関係にこそあるということである。それ故に、マルクスが、「価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる」(Kapital, I, S. 67, 傍点一頭川)という場合の「価値関係の媒介」とは、一方の具体的労働と他方の具体的労働とが抽象的人間労働として直接的な同一性をもつ特定の相互関係、あるいは同じことだが、一方の具体的労働に潜在する抽象的人間労働が他方の具体的労働をその現象形態とする固有の内在的関係を指すと考えるべきである。けだし、価値関係とはもともと概念的にいて交換関係にある諸商品に体化された具体的諸労働がそれらの不等性を捨象されたうえで人間労働一般として同等であるという関係だからである。ところが、現実になれわれの眼前にうつるのはリンネルの価値が

ストレートに上衣の使用価値で現われる表面的な現象形態にすぎず、単純な価値形態というそれ自体一個の生成しきった結果においては本質としての価値が媒介される内在的過程は全部消え去ってしまっているのである。この点においては、それ自体の独自の流通の内部に産業資本の循環過程 $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ をもち、産業資本の価値増殖に立脚して初めて成り立ちうる利子生み資本の特有な流通様式 $G-[G-W \cdots P \cdots W'-G']-G'$ が、眼前において貨幣がより大なる貨幣を産出する無媒介的な運動 $G-G'$ として無概念的な形態をとって現われ出ると、単純な価値形態においてリンネルの価値という社会的定在が一足飛びに上衣の使用価値という自然的定在で転倒的に現われうるのは丁度同じことであり、われわれは単純に二種類の使用価値が交換される量的関係として現われる単純な価値形態の背後に隠蔽されている真の社会的関係、つまり、ある具体的労働は別種の具体的労働で抽象的人間労働として現われるまさにその二つの具体的労働相互の社会的関係にこそ着目しなければならないのである。言い換えれば、諸物が取り結ぶ社会的関係はその背後に隠された社会的関係の転倒的な現象形態であると一般的にいう場合、ここでの背後に隠された真の社会的関係とは具体的諸労働相互の社会的関係、すなわち、ある具体的労働が別種の具体的労働をもって抽象的人間労働として現われる内在的関係にほかならないのである。まさしく、「『社会的であること』の標準は、それぞれの生産様式に特有な諸関係の性質から借りられるべきであって、それに無縁な諸観念から借りられるべきではない」(*Kapital*, 1. Aufl., S. 32) のである。

以上、われわれは、本節において、第一節で二商品の価値関係から貨幣形態の原型として析出した単純な価値形態を第二節で定立した価値概念の内的必然的な展開、つまり「価値の実体としての労働が取るところの特定の形態」(*Mehrwert*, II, S. 169) として説き、もって価値と価値形態との間に潜む内在的連絡関係を解き明かしたのである⁽²⁾。

最後に、これまでの全三節に亘る論理展開を小括する意味でいいそえておけば、マルクスは価値と価値形態との間に秘められた内在的な因果関係を論証す

る論述をもって「相対的価値形態の内実 (Gehalt)」という表題を付しているのであるが、ここでの「相対的価値形態の内実」とは或る具体的労働が別種の具体的労働でもって抽象的人間労働として現われるところの価値と価値形態との間に伏在する内在的関係を直接的に指すと考えるべきである。なぜならば、価値という社会的定在が使用価値という自然的定在で転倒的に現出する真の秘密は相異なる二つの具体的労働相互の社会的関係にこそあり、別言すれば、価値と価値形態との間に隠された内奥の分析こそ「相対的価値形態の内実」の叙述の庄巻をなすからである⁽³⁾。

- (1) マルクスは、「相対的価値形態の内実」の第五パラグラフの末尾に注(17a)を付して、「およそ商業はある労働と他の労働との交換にほかならないのだから、すべての物の価値は労働によって最も正しく評価される」(Kapital, I, S. 65)と主張したB. フランクリンの議論に対して次のように論評する。

「フランクリンは、すべての物の価値を『労働で』評価することによって、彼は交換される諸労働の相違を捨象し——したがってそれらの労働を同等な人間労働に還元しているのだということ意識してはいない。」(ibid.)

最初の引用文にみられるように、フランクリンは一面では貴金属という外在的価値尺度の底に労働時間という内在的価値尺度を事実上発見し、「ある労働」でも「他の労働」でもない形容詞抜きの「労働」が諸商品の内在的価値尺度であることを見抜いたのであるが、しかし、他面では或る商品に物質化された具体的労働は直接的に形容詞抜きの「労働」つまり抽象的人間労働によって評価せられようと主張したのである。つまり、フランクリンにとっては、古典派経済学者と同じように「現実の生産物の交換価値への転化は自明のことである」(Kritik, S. 42) ったがために、一面的に内在的価値尺度としての労働時間に気が取られ、商品生産の基礎の上では私的な具体的労働は直接的に社会的労働の形態として通用しないがゆえにその独自の社会的労働の形態が価値に表わされ、従って、ある私的な具体的労働が独自の形態にある社会的労働として現われるには別種の私的な具体的労働が独自の形態にある社会的労働の直接的な表現形態に成り上がらねばならない深みにまで思い至らなかったのである。従って、相異なる具体的諸労働から無意識的にその相互関係のうちには価値実体としての抽象的人間労働を見いだしたフランクリンをマルクスが賞讃していることからしてここでの論評はむしろ第一節「商品の二つの要因 使用価値と価値」に挿入してしかるべしと思われるが、しかし、一見場違いの感じを与えるこの印象は単なる表面的な外観にしかならない。マルクスの論評の目的は、フランクリンが無意識的に具体的労働から抽象的人間労働を分離しえたという功績を認めたくて、更に一步踏みこんで、フラン

クリンが商品生産を社会的生産の特殊歴史的な形態として把握する観点を欠落させたがゆえに或る商品に物質化された「ある労働」があたかも直接的に形容詞抜きの「労働」によって評価されるかのごとき錯覚に陥っている点に批判することにあり、言い換えれば、「ある労働」を形容詞抜きの単なる「労働」で評価しうるにはまさに「他の労働」そのものが形容詞抜きの単なる「労働」の直接的な実現形態として相対しうる限りにおいてであるということの指摘にある。われわれは、マルクスが注(17a)に託した真の理論的意図をここにみるべきである。

なお、フランクリンに対する立ち入ったマルクスの評論については更に、*Kritik*, S. 41-2を参照されたい。

- (2) よく知られているように、マルクスは、後の「等価形態」の項目において「等価形態の考察にさいして目につく第一の特色」(*Kapital*, I, S. 70)として「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になる」(*ibid.*)という「取り替え」(*ibid.*)を指摘した後で、続けて「具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になる」(*ibid.*, S. 73)という「等価形態の第二の特色」(*ibid.*)、「私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になる」(*ibid.*)という「等価形態の第三の特色」(*ibid.*)に言及しているが、これまでの価値と価値形態との間に隠された内面的関連に関する考察からすれば、等価形態の第二・第三の特色は「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になる」まさに等価形態の第一の外観上の特色の背後に隠蔽されている内面的関係を単に論理的に反省したものすぎないことは一目瞭然であろう。逆にいえば、社会的定在としての価値がストレートに使用価値としての自然的定在で転倒的に現われうるとすれば、如何なる理論的な意味においてもこの外在的關係から「具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になる」あるいは「私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になる」という内在的關係を論じることではできないのである。

従って、これとの関連において是非とも論及しておくべきは、マルクスが等価形態の三つの特色を指摘した後で特別にその最後の二つの特色に関して紙面を割き、アリストテレスの理論的限界性に触れている点である。即ち、第一節注(3)において述べたように、アリストテレスは二商品の交換関係のうちに直接的な同等等性関係を発見して貨幣形態を単純な価値形態に還元しえたのであるが、しかし、このような天才的な洞察をなしえたアリストテレスでさえ、単純な価値形態において、二つの使用価値に本質的な同等等性なしには一方の使用価値が他方の使用価値に対して共通な属性を表わしえないはずであるというきわめて制限的な認識に終始し、従って、他方の使用価値が一方の使用価値に対して表わす共通な属性は両者に体化された具体的諸労働の相互関係のうちに成り立つ価値実体としての抽象的人間労働であり、単純な価値形態は他方の具体的労働が一方の具体的労働に代わってその抽象的人間労働の現象形態になる限りにおいてのみ成立するということまで掘り下げえなかったのであった。それ故に、

ここで読み取るべき要点は、マルクスが、二商品の価値関係から単純な価値形態を形式論理的に析出したアリストテレスでさえ生きた社会の歴史的な限界に起因して単純な価値形態の理論的な成立根拠を証明しえなかった致命的欠陥を批判している点にある。因みに、マルクスは、等価形態の第一の特色に言及する際に、一方で「鉄は、棒砂糖の重量表現では、両方の物体に共通な自然属性…を代表し」(*Kapital*, I, S. 71)、他方で「上衣は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわち…純粋に社会的な或るものを代表している」(*ibid.*)にもかかわらず、棒砂糖の重さが鉄片の自然形態で現われる例解を用い、この後直ちに「リンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば、上衣に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが或る社会的関係を包蔵していることを暗示している」(*ibid.*, 傍点一頭川)として両者の事例の同一性の裏にある差別性に注意を喚起するのであるが、ここで示されていることは、二商品の価値関係に着目して等価形態の第一の特色を見いだすことそれ自体は或る自然的物質が或る自然的属性を表わすことを見いだす事柄と完全な同一性をもつということ、従って、「価値概念の欠如」(*ibid.*, S. 74)をあらわに表明するアリストテレスでさえその析出に成功しうる形式論理的な分析にすぎないということであり、両者の事例のもつ決定的な差別性は「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になる」外在的關係の背後に伏在する等価形態の第二・第三の特色という「或る社会的関係」にこそ存在するということである。従って、「相対的価値形態の内実」の第三パラグラフの分析は等価形態の第一の特色の析出と裏腹の關係にあり、第五パラグラフの分析は等価形態の第二・第三の特色の析出に対応する。このように理解することで初めて「最後に展開された等価形態の二つの特色は、価値形態を他の多くの思考形態や社会形態や自然形態とともに はじめて分析したあの偉大な探究者にさかのぼってみれば、もっと理解しやすいものになる」(*ibid.*, S. 73)と切り出してアリストテレスの価値概念の欠如を批判する文脈に秘められたマルクスの真意がクローズアップするのである。

- (3) このことの傍証は初版『資本論』の付録をなす「価値形態の補足的な、もっと教師的な説明」(*Kapital*, S. 18)にある。*Kapital*, 1. Aufl., S. 766—7を本稿の論理展開と比較対照されたい。

第四節 「回り道」の理論的眼目

われわれは、これまでの論理展開において、価値形態を価値の内的必然的な現象形態として把握する労働価値論の根本視角から、本質としての価値と現象形態としての価値形態との間に伏在する隠された内在的關係を明らかにした。

ところで、われわれは、行論の必要上これまでに立ち入ることをあえて避けてきたのであるが、これまでの論理展開のうちに「相対的価値形態の内実」の理論的核心をなす第五パラグラフにおいて登場する「回り道（Umweg）」の理論的含意が即自的に解き明かされているのである。そこで、本節において、これまでに展開した本論に対する系論としてマルクスが「回り道」にこめた真の理論的眼目を明確化する。

これまでの議論から既に明らかのように、価値形態とは私的な具体的労働が社会的労働の独自の形態たる抽象的人間労働として表わされる商品生産に固有な方法にはかならない。何故ならば、価値が価値形態として自然必然的に現象しなければならない本質的根柢は、或る商品に物質化された或る私的な具体的労働が別種の私的な具体的労働でもって抽象的人間労働という独自の形態の社会的労働として現出しなければならないという点にこそあり、社会的定在としての価値が自然的定在としての使用価値で転倒的に現われるのは相異なる具体的労働相互の内在的関係の単なる表面的な最終的帰結にしかすぎないからである。「価値形態について言えば、この形態こそは、まさに、私的労働者たちの社会的な諸関係を、したがってまた私的諸労働の社会的な諸被規定性を、顯示するのではなくて、それらを物的に蔽い隠すのである。」（*Kapital*, 1. Aufl., S. 39, 傍点—マルクス）従って、われわれは、リンネルの価値が転倒的に現われる上衣の使用価値を、私的な具体的労働を表わす織布労働に対して社会的労働の独自の形態たる抽象的人間労働を表わす裁縫労働の単なる仮装形態とみなすべきなのであり、言い換えれば、価値が価値形態として現出する外面的な関係をみてその基底に或る私的な具体的労働が社会的労働の独自の形態たる抽象的人間労働として翻訳されている本質的な内在的関係を透視しなければならないのである⁽¹⁾。以下の論述は価値形態の概念的本質についてのマルクスの力説にほかならない。

「価値を貨幣であらわすこと、あるいは同じことだが価値が価格に転化するところについて、もうすこし立ちいってみると、それは、すべての商品の価値に一つの独立的かつ同質的な形態をあたえるための、つまりそれらの価値をひ

としい社会的労働の諸量としてあらわすための、一つの手順だということが、諸君にはおわかりになるだろう。」(*Lohn, Preis und Profit*, Marx-Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin, 1968, S. 127, 傍点—マルクス)

「商品所有者たちは金という一つの物を、一般的労働時間の直接的定在に、したがって貨幣に転化することによって、彼らの私的労働の生産物を社会的労働の生産物としてあらわす。」(*Kritik*, S. 82, 傍点—頭川)

「商品の貨幣としての定在にさいしては、……商品はすべて社会的な抽象的一般的労働の定在として表わされる。」(*Mehrwert*, III, S. 133, 傍点—マルクス)

ところが、第二節において考察した通り、商品生産と正反対の生産形態をなす共同的生産の場合には具体的労働が社会的労働として現われる仕方は商品生産の場合と対照的である。というのは、共同的生産の基礎上では或る具体的労働はそのまま直接的に社会的労働の形態として普遍的に通用し、従って、共同的労働としての具体的労働は改めて別種の具体的労働でもって社会的労働として現われねばならない必然性は微塵も存在しないからである。つまり、ここでは、「現物形態にある個々人の一定の労働が、労働の一般性ではなくて特殊性が、社会的紐帯をなし」(*Kritik*, S. 21)、それゆえに、「労働の社会的性格は、明らかに個々人の労働が一般性という抽象的形態をとることによって……媒介されていない」(*ibid.*)のである。従って、ここからいいうことは共同的労働としての具体的労働と商品生産労働としての具体的労働とがそれぞれ普遍的に通用する社会的労働として現出する仕方は一八〇度正反対だということである。

しかるに、「相対的価値形態の内実」の大黒柱をなす第五パラグラフの固有の課題は、商品生産労働としての具体的労働が独自の形態にある社会的労働として現われる特有な仕方を明らかにすることにあつた。換言すれば、マルクスはこの第五パラグラフにおいて相異なる二つの具体的労働相互の内在的関係を分析することで価値形態が商品生産労働としての具体的労働をして独自の形態にある社会的労働として現わせしめる商品生産に固有な方法であることを根底

的に明らかにしたのである。

それゆえに、ここでは課題は既に解決されているのである。すなわち、共同的生産の基礎上では具体的労働はそのまま社会的労働として現われるのに反して、商品生産の基礎上では或る具体的労働は別種の具体的労働でもって初めて社会的労働として現われうるにすぎず、従って、或る具体的労働は別種の具体的労働でのみ社会的労働として現われる「回り道」を要するということが、これである。あるいは別の言葉でいえば、商品生産の基礎上では或る具体的労働が独自の形態に或る社会的労働として現われる方法は、共同的生産の基礎上においてある具体的労働が社会的労働として現われる無媒介的方法とは対照的に別種の具体的労働でもってする媒介的方法にほかならず、別種の具体的労働が或る具体的労働に潜在する独自の形態の社会的労働を代位して表わす媒介された方法こそ商品生産に固有な「回り道」をなすということである。価値形態が或る具体的労働を独自の形態にある社会的労働として表わす仕方であるならば、これと対比させられるべき照応関係にあるのは共同的生産において或る具体的労働が直接的に社会的労働として現われる仕方であり、従って、「回り道」の登場する第五パラグラフの固有の課題が或る具体的労働を独自の形態にある社会的労働として表わす仕方の分析にある以上、「回り道」は別種の具体的労働が独自の形態にある社会的労働を或る具体的労働に代わって表わす相対的な方法を指すとする以外の解決を許さないものである。因みに、マルクスは、第五パラグラフにおいて、「織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元することそれ自体をもって「回り道」と規定しているが、ここでの中心問題が織布という具体的労働をして独自の形態の社会的労働として表わす仕方にある限りでは織布労働がストレートに社会的労働として現われるのではなくて「事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元」された裁縫労働が独自の形態にある社会的労働として現われるべき当の主体である織布労働に代わって社会的労働たる実を表わすことそれ自体が「回り道」なのであり、このような裁縫という代理者によってのみ「織布

もまた、それが価値を織る限りでは、それを裁縫から区別する特徴をもっていないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われる」(Kapital, I, S. 65) 方法こそ「回り道」だとされているのである。

以上、われわれは、これまでに構築した価値と価値形態との内在的關係についての積極説を踏み台にして「回り道」の理論的眼目を明らかにした⁽²⁾。

- (1) このことを別の言葉でいえば、諸商品価値が貨幣で表わされるということは諸商品に投下された個別的な私的労働時間が相互に通約可能な「社会的労働時間 (gesellschaftliche Arbeitsstunde)」(Kapital, I, S. 117) に焼き直されるということにはほかならない。つまり、同一部分の三つの相異なる生産条件の下で生産された諸商品の個別的価値がおのおのの金xグラム、yグラム、zグラムだという場合、先ずもって注目すべきは相異なる生産条件の下で費やされた個別的労働時間は本来量的に比較不能であるのにここではおのおのの個別的労働時間が、「一定量の社会的労働時間の独立的表現にほかなら」(Mehrwert, I, S. 58) ず、「社会的労働時間の一定量としてのみ存在する」(Mehrwert, III, S. 134, 傍点一頭川) 金という外在的尺度で測られることによって初めて量的に比較可能な社会的労働時間に铸直されるという点にあり、ここでの相異なる金量は社会的労働時間の別の表現にほかならないのである。逆言すれば、商品生産の基礎上では同一種類の諸商品に投下された労働諸量は貨幣という外在的尺度で表わされてのみ量的な比較可能性をうるのである。

「商品の価値量は、社会的労働時間にたいする或る必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表わしている。価値量が価格に転化されるとともに、この必然的な関係は、一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現われるのである。」(Kapital, I, S. 117)

「個々の商品はそのものとしては一般的な労働時間を表わすことはできない。すなわち、個々の商品が一般的な労働時間を表わすことができるのは、貨幣である商品との等式、つまりその商品の貨幣価格でだけである。」(Mehrwert, III, S. 136, 傍点一マルクス)

従って、種々の個別的価値が一つの社会的価値または市場価値に整約される場合には種々の量的に異なる「社会的労働時間」が「社会的必要労働時間 (gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit)」(Kapital, I, S. 53) に平均化されるのである。換言すれば、個別的価値と社会的価値または市場価値との関係は社会的労働時間と社会的必要労働時間との関係に正確に対応する。

- (2) ここで是非とも論評しておくべきは戦後「回り道」の不動の解釈として定着してきた久留間敏造氏の所説についてである。周知の通り、久留間氏は価値の必然的な現象形態としての価値形態把握において「ある特定の商品が等価値態に置かれているのは

なぜかという問題と、等価形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのは如何にしてかという問題とは、はっきり区別して考えられうるし、また区別して考えられねばならない二つの異なった問題である」(〔1〕54ページ)として商品所有者の欲望の演じる役割を捨象して考えるべき理論的根拠を明確化することで価値と価値形態との関係についての理論水準を一挙に引き上げられ、われわれもまた氏の画期的な著作から多くを汲み取ったのであるが、しかし、率直に言って、氏の「回り道」解釈にはにわかには賛同しがたい懷疑の念が残らざるをえないのである。「回り道」に関する氏の議論をわれわれなりに要約すれば、単純な価値形態においてリンネルは上衣を自分に等置することによってきつめ上衣に対して抽象的人間労働の直接的な体化物としての規定性を与え、しかるうえで、抽象的人間労働の直接的な体化物としての上衣の使用価値で自分の価値を表現する、これが「本当の意味の廻り道」(同上、62ページ)だということであるが、しかし、ここで生じる第一の疑問は、リンネル価値の上衣体による表現とは氏御自身も明言されているように「上衣の使用価値がそのままリンネルにとって価値の姿になる」(同上、63ページ)、つまり具体的労働を表わすリンネルに対して上衣が抽象的人間労働の直接的な体化物として現われることにほかならないのに、一体氏は何故にリンネルが上衣に対して抽象的人間労働の直接的な体化物としての規定性を与える過程とは区別されるものとして更に別個に抽象的人間労働の直接的な体化物としての上衣でリンネルが価値を表現する過程なるものを説かれるのかということである。換言すれば、リンネルに対して上衣が直接的な価値定在として現出するという場合の「価値」とはリンネル価値そのものにほかならず、従って、ここではリンネル価値は上衣の使用価値において現象しているのである。まさしく、「価値の定在としての上衣でリンネル価値を表現するというのは、すでに価値定在という規定が価値表現を前提としているのでタウトロジーである。」(下平尾勲〔4〕74ページ)第二の疑問は、氏の立論からすれば、氏の解釈される「回り道」の論理はそのまま棒砂糖の重さが鉄片の物体形態で表わされる事例にも妥当することになるが、このような自然的属性が自然的物体で表わされる事例にも妥当しうる「回り道」が一体如何なる意味で社会的属性が自然的物体で表わされる「価値表現の根本の秘密を形成するいわゆる『廻り道』」(〔1〕7ページ)をなすと規定されるのかという点にある。第三の疑問は、氏の立論がまさに「回り道」の登場する第五パラグラフの固有の内容を踏まえて提出されていないという点にある。というのは、「回り道」は「相対的価値形態の内実」の第三パラグラフとその固有の課題を異にする第五パラグラフにおいてこそ登場するのに、氏の議論ではあたかも第三パラグラフと第五パラグラフとが同一課題を論じているかのごとく解釈されたうえで「回り道」の含意が説かれているからである。最後に、第四の疑問は、第二の疑問と関連して、氏の解釈される「回り道」は如何なる意味で「回り道 (round-about)」たりうるのか、言い換えれば、「回り道」と対概念をなす「近道 (short-cut)」とは何

であるのかが判然としないということにある。なぜならば、先に指摘した通り、氏の立論からするならば、それが社会的属性であれ自然的属性であれすべて氏の主張される「回り道」を経て初めて表わされ、あるものの内在的属性の表現様式はすべて「回り道」であるということにならざるをえず、従って、社会的か自然的かの相違なくすべてのものの内在的属性の表現様式にはもともと「近道」は考えられないことになるからである。「近道」と対概念をなす限りで初めて「回り道」が意味をもちうるのであるから、対極的な概念をなす「近道」の何たるかが明言的に規定されえない「回り道」は不条理である。

このように、われわれは、久留間氏の提示された「回り道」理解におも不明瞭性が残されていると考えざるをえないのであるが、いうまでもなく、この「回り道」理解の曖昧さの底には第三パラグラフと第五・第六パラグラフとの文脈上の論理的関係把握の不明明性、換言すれば価値と価値形態との内在的関係把握の不明明性があると思われる。何故ならば、二商品の交換関係から貨幣形態の原基形態としての単純な価値形態を析出する分析とこの単純な価値形態が価値の必然的な現象様式として如何にして成立しうるかという価値と価値形態との内在的関係の分析との明確な区別付けが行なわれえなければ、「回り道」は第五パラグラフの固有の課題との関連でのみ解釈されねばならず、従って、ここでは共同的労働がそのまま社会的労働として現われるのに反して或る商品生産労働は別種の商品生産労働をもってしてのみ相対的に社会的労働として現われるまさにその媒介的な仕方こそ「回り道」と規定されねばならない所を見抜くことは必ずしも困難ではないと思われるからである。

なお、「回り道」に関する久留間氏の解釈を取り上げた関係でここでは更に久留間氏流の解釈に批判的な論者の所論にも触れておかねばならない。即ち、下平尾勲氏は久留間氏の価値表現理解のトートロギー的性格を鋭角的に衝き、自説を次のように対置される。

「わたしは、…(リンネルと上衣とを…頭川) 価値として等置することにより、相異なる労働を人間労働として相互に等置することが『まわり道』の論理だと解する。」〔4〕 89ページ

しかし、われわれは下平尾氏に代表される見解にも賛成しがたいのである。というのは、第五パラグラフの主題は織布労働に潜在する抽象的人間労働が裁縫労働を通じて現象する際の特有な様式の分析すなわち共同的生産とは異なって織布労働の社会的性格はそれ自体では表わしえず相対する裁縫労働によってのみ迂回的に表示しうる特殊歴史的な方法の分析にあるのに、下平尾氏に代表される見解は必ずしも私的労働の社会的性格の現われる特殊歴史的な相対的仕方との関係で提出されていないからである。

かくして、われわれはこれまでに提示されたいずれの「回り道」解釈にも疑問が残るというほかないのである。

む す び

われわれは、本質としての価値と現象形態としての価値形態との間に潜在する内在的関係の論証をもって中心課題とする本稿のこれまでの論理展開において、まず二商品の価値関係から貨幣形態の細胞形態としての単純な価値形態を析出し（第一節）、続いて価値形態がそこから必然的に発生するところの価値概念を定立して（第二節）、価値と価値形態との間に隠された内面的関連論証のための二つの論理的前提を据え、しかるうえで、価値という本質から価値形態という現象形態を首尾一貫して発生論的に展開し、もって価値と価値形態との間に一本の上向線を描いたのである（第三節）。従って、以上の分析を総括した高みからいいうることは、二商品の価値関係からの単純な価値形態の析出をもって単純な価値形態そのものの成立根拠つまり価値と価値形態との内在的関係の証明と取り違えてきた従来の支配的な理解はきわめて皮相であったというそりを免れがたいということである。例えていえば、これまでの支配的な議論は、貨幣形態を眼前にしてここでは金商品がそれ以外のすべての商品に対して価値そのものを表わしているということを確認し、この単なる事実の確認をもって価値と価値形態との間の内在的関係の論証に置き換える論法と概念上完全に同じである。翻っていえば、単純な価値形態の成立根拠についての通説的見解に残された不明瞭性は価値形態の扇のかなめをなす価値概念の把握の不分明性に起因する。この意味では、理論的後続者としての価値形態の問題は実は理論的先行者としての価値概念の問題にはかならない。つまり、抽象的人間労働の特有な存在様式をもってその生命とする価値概念は価値形態との内面的関連を即自的に予想せしめる母胎であり、価値形態理解の試金石は抽象的人間労働の特有な存在様式を本質とする価値概念把握にこそある。因みに、古典派経済学者は価値概念の欠如のために貨幣形態の謎的性格さえ意識しえなかったが、これに反して、マルクスは商品生産に独自の社会的労働の形態を特有な存在様式をもつ抽象的人間労働に見いだすことで価値概念を根底的に定立したために初めて貨幣形態の内包する奇怪さを率直に受け取めえ、従ってまた、こ

の価値概念を根本的基礎にして経済学上の一大難問に理論的決着をつけたのである。その意味において、マルクスにとって、文字通り「課題は、その解決の手段と同時に生まれ」（*Kapital*, I, S. 103）たのである。それ故に、価値の必然的な表現様式としての価値形態の発生論的展開においては、商品に表わされる労働の二面的規定に立脚して定立された価値概念にこそマルクスの傑出した理論的独創性とその不滅の光彩を放っているのである。ここに、われわれは、理論経済学上群を抜いて一人屹立するマルクスの不世出の天才性をみるべきである。

参考文献

- 〔1〕久留間敏造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年。
- 〔2〕富塚良三「価値形態論と交換過程論」『恐慌論研究』、未来社、1962年所収。
- 〔3〕富塚良三『経済原論』有斐閣、1977年。
- 〔4〕下平尾勲『貨幣と信用』、新評論、1974年。
- 〔5〕宇野弘蔵『経済原論』『宇野弘蔵著作集』第一巻、岩波書店、1973年。
- 〔6〕宇野弘蔵『経済学方法論』東大出版会、1962年。
- 〔7〕宇野弘蔵編『資本論研究』I、筑摩書房、1967年。
- 〔8〕D. リカード『経済学及び課税の原理』上巻、岩波文庫、小泉信三訳。
- 〔9〕S. ベーリ『リカード価値論の批判』日本評論社、鈴木鴻一郎訳。
- 〔10〕ローゼンベルグ『資本論注解』1、青木書店、宇高基輔・副島種典訳。
- 〔11〕頭川 博「価値論の—基本問題—抽象的人間労働の存在様式と価値概念—」『一橋論叢』第81巻第6号、1979年。